

夏目漱石・作 坊っちゃん より抜粋

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。時々には小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃せばいいのと思った。気の毒だと思った。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣いで金鰐や紅梅焼を買ってくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元へ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼餛飩さえ買って来てくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋ももらった。鉛筆も貰った、帳面も貰った。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向うで部屋へ持って来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云ってくれたんだ。おれは無論入らないと云ったが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇口へ入れて、懐へ入れたなり便所へ行ったら、すぼりと後架の中へ落してしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に

話したところが、清は早速竹の棒を捜して来て、取って上げますと云った。しばらくすると井戸端でござあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けたのを水で洗っていた。それから口をあけて壹円札を改めたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭いやと云ったら、それじゃお出しなさい、取り換えて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三円持って来た。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよと云ったぎり、返さない。今となっては十倍にして返してやりたくても返せない。

入力：真先芳秋

校正：柳沢成雄

1999年9月13日公開 2011年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。